

はじめに

藤田 佳久

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長



ここに「愛知大学東亜同文書院大学記念センター、オープン・リサーチ・センター」第2号をお届けする。2006年の初夏に当センターが文部科学省により「オープン・リサーチ・センター」として選定され、5カ年間のプロジェクトの早くも第2年目を終了することになった。この第2号は当記念センターの「オープン・リサーチ・センター」としての第2年目の活動成果を収録したものである。第1年目はこのプロジェクトの取りかかりや準備体制の整備、それに展示施設の改修工事などもあって、実質的には半年間ほどの活動とその成果に留った。しかし、2年目の2007年度は、前年までの準備体制も整って、十分に1年間の活動ができたといえる。それをこの年報から読み取っていただければ幸いである。

2年目の大きな成果は、まず前年に引き続き、東亜同文書院関係および東亜同文書院との関係で設立された本学（愛知大学）の大学史展示室、また関連施設として教育・啓蒙施設としての講義室などが改修され、従来の展示施設が大きく生まれ変わったことを挙げておきたい。あわせて日本語、英語、中国語による音声ガイドシステムやタッチパネルによるプレゼンテーション方式も整備し、さらに「東亜同文書院から愛知大学へ」というタイトルのDVD版も作成でき、次年度以降の大いなる活用が期待できることになった。

次いで、上海交通大学を中心とした中国側の研究者を招いて、東亜同文書院の歴史とその役割をめぐる日中間の国際シンポジウムを開催したことである。本号にはその詳細な内容も収録しており、ご参照いただければ幸いである。上海交通大学はかつて南洋公学として設立された古い学校である。それが工業系の交通大学となり、徐家匯地区へ移転した東亜同文書院はその隣同士のように立地していた。その時期は書院の最盛期であり、中国や東南アジアの研究がすすみ、アカデミックな蓄積をすすめ、のちに大学へ昇格するベースとなった。隣同士の学校として学生達の多方面の交流は活発に行われ、共存・平和の時代であったが、日中戦争が始まり、第2次上海事変のさい、書院の校舎は中国兵の手により焼失し、多くの知的財産を失った。一旦、長崎へ引揚げたのち、疎開により避難民の場所となった交通大学を借用する臨時校舎として書院の教育が始まったが、上海交通大学側にとっては、校舎が奪われたことになり、平和な時代から緊張な時代へと一変した。戦後、このような経緯をふまえ、霞山会（東亜同友会の後身）は上海交通大学へのサポートをつづけ、その上に今から5年ほど前、東亜同文書院をめぐる日中間の共同研究を史実をふまえて行う計画がスタートすることになった。この成果発表のシンポジウムが2006年12月に上海交通大学であり、史実をふまえた画期的な研究会であったため、中国側研究者の協力を得て、それを愛知大学でも再度再現、実施することになったものである。東亜同文書院をめぐる日中間の共同的研究の第1回目であり、画期的なシンポであったといえ、今後もそれを発展的に継承出来ればと願っている。

3つ目には、東京のど真中、霞ヶ関に完成したコモンゲート西館の37階で東亜同文書院の展示会を実施できたことである。これは昨年の横浜に続く、関東地方での第2弾で、あわせて愛知大学の東京事務所の同所への移転記念事業と共催する形となった。霞ヶ関にあった霞山会館は戦後、9階建のビルに生まれ変わり、愛知大学の東京事務所は滬友会（東亜同文書院の同窓会）事務所とともにそのビルの中にあった。しかし、文科省などの高層ビル化計画で、建物はとり壊され2007年11月、霞山会は新ビル・コモンゲート西館の上層階へ移転した。その移転記念もふくめ、東亜同文書院の展示会と講演会を新装なった霞山会館37階で開催し、東京を中心とした関東の多くの方々にこの展示をみていただけ、盛況であったことは何よりであった。講演会のうち作家の船戸与一氏の講演はブックレットとして刊行しており、ご参照下されば幸いである。

4つ目は、新たに『愛知大学史研究』の創刊号を刊行できたことである。書院をベースとした愛知大学の歴史は、東亜同文書院との重なり合いが色濃くみられた。それらを多方面からの視点を加え、愛知大学史研究という分野への本格的取り組みがすすんだことは、愛知大学の存在を「温故知新」という視点から広く共有し、今日および今後の愛知大学の進む方向を検討する上でも重要な契機になるものと確信したい。

その他、東亜同文書院や愛知大学史に関する講演会や研究会も活発に行われ、当センターの若手研究者であるポスト・ドクターやリサーチアシスタントの活躍も目立った。

最後に、当センターのオープン・リサーチ・センターが、新聞などを通じて地域に広く広報されたことも巻末に添えさせていただいた。これにより当センターの活動の一端を知っていただけたら幸いである。